コラム

シニアアンサンブルのための楽器知識

[23] ティンパニ

ティンパニはシニアアンサンブルではあまり使用されていませんが、オーケストラでは大変重要な打楽器です。一般の太鼓の大部分のものが、胴の両面に膜を張ってあるのに対し、ティンパニは、銅製の釜型の胴に1枚の膜を張った大型の太鼓です。英語でKettledrum（釜太鼓）というのはまさにその形を表したものです。2枚皮の太鼓のような複雑な共振関係を生じないために、特定の音高を充分に感じさせるものです。ほとんどの場合、異なる音高のものを（2～4個）組み合わせて使用するので、複数形の"Timpnni"の名称を用いますが、もし1個だけなら"Timpano"です。

＜形態、構造、音律等＞

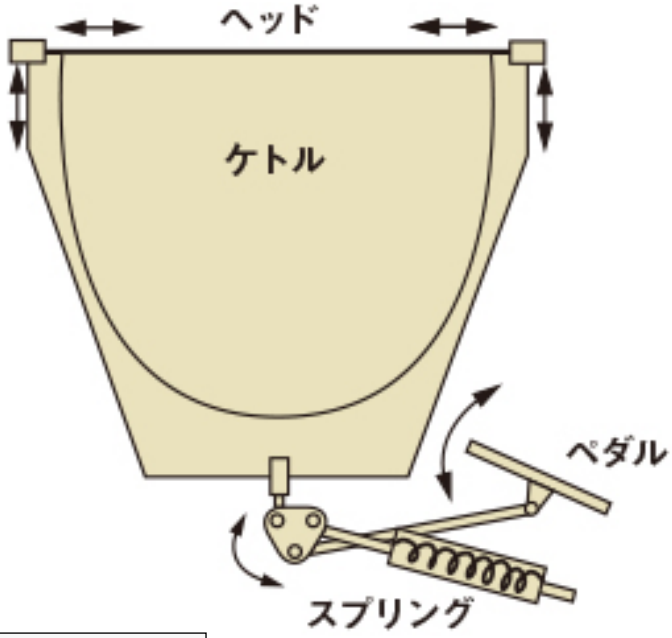
ティンパニはアジア原産の古くからある楽器ですが、その古い時代から既に複数（多くの場合2個）を組として用いてきた模様です。これがヨーロッパに渡り、特にオーケストラ等で使われて以来非常に発達し、音質的にも改良されました。中でも、膜の張力を変化させて音高を変えるための手段・装置については、今日まで改良が続いています。以前には表面の張力を6～7ケの手締めネジで調整する「手締めティンパニ」の時代が長く続きましたが、近年「ペダルティンパニ」と呼ばれる前方（つま先）を踏めば音高が上がり、後方（かかと）を踏めば下がるようになっていて1台のティンパニで5度くらいの幅で上下できるものが主流になっています。

＜ペダルティンパニ＞

ペダルは、締め枠の周囲数箇所からきた金属棒を下部で1点に集め、それをペダルの操作で、上下に動かすのです。これにより膜の張力を変化させるわけですが、膜に与えた力はペダルに逆に伝わらないようになっており、打奏のたびに膜がゆるまないようになっています。

大きさ及び音高の点では32インチ（81㎝）、30（76㎝）28（71㎝）25（64）24（61）のようなサイズのもの、またはそれに近いものが多く使用されます。大きいものほど音が低く、小さいものほど高くなります。各々5度くらいの音域ですから4個の場合1、5オクターブ、程度の音域になります。古典の時代には、通常2個を、演奏する主音と属音に合わせておいたことが多いのですが、その後次第に、もっと音の数を多くしたいことと、演奏中にでも音高を変えたい欲求が増してきたため、前述のように音高を調節する機構が発達したのです。現在のオーケストラ曲その他では、普通3～4個のティンパニを用いています。バチはフェルトやコルクなどの頭をもつものが普通ですが、時により、頭の比較的硬いもの、柔らかいもの、形状の異なるもの・・・・と使い分けます。

アマチュアオーケストラの各団は通常2個の備品を所有しています。練習の度に運搬が大変ですが皆で手伝っています。3～4個所有している団も多いようです。



ペダルティンパニ

＜お詫びと訂正＞

前号で、トロンボーンの記譜で高音部はアルト記号と記しましたが「テナー記号」の誤りでした。

（参考文献　音楽の友社「楽器学入門」
全シ連　岡村記）